

フロリダ大学での 特別研究休暇

秋 間 広

2009年3月末より本学のサバティカル制度を使って、アメリカ・フロリダ州・ゲインズビル市にあるフロリダ大学に滞在しております。こちらに来て3ヶ月が過ぎました（原稿執筆時点）。この原稿をお借りして、こちらでどのようなことを感じて、どんなことをしているのかをご紹介できればと思います。

フロリダにはディズニーワールドなどの観光地があって、究極の楽園と思っている人が多いようですが、フロリダは皆さんが想像するような常夏のリゾート地ではありません。名古屋の真夏に匹敵する暑さが6月頃から10月頃まで続く厳しい環境にあります。私の知り合いでフロリダのケネディスペースセンターに従事していた人も同様なことを言っていたのを思い出しました。ここ数日も30度を超える日がほぼ毎日続いています。日中の屋外はとにかく暑いです。時には非常に強いハリケーンもやってきます。3年ほど前にはハリケーンの影響で1週間ほど電気と水道が使えない状態が続いたと知り合いの日本人の方から聞きました。観光と住むのは全く違うということでしょう。

さて、私が現在所属しているのは、Department of Physical Therapyの所属長・教授のDr. Vandenborneという女性研究者のラボです。フロリダ大学の共同利用施設にマックナイト・ブレイン・インスティテュートという脳科学の研究を行う共同施設があって、人間用のMRIや動物用のMRIなどが設置されています。我々のラボでは筋肉の評価にこのMRIを使っております。現在こちらのラボで進められている研究は、デュシェンヌ型筋ジストロフィーという3,500人に一人の確率で発症する治療困難な難病の子供達を対象に、MRIを使って太ももやふくらはぎの横断画像を撮影しています。筋ジストロフィーが進行すると、まず脚などの筋肉が萎縮していくと同時に、筋肉がいわゆる霜降り肉のような状態になっていきます。画像処理を使って、いかに上手くこの霜降り度合いを定量化するかというのに取り組もうということになりました。まずはこれまで日本でやってきたスキルを応用して、どこの筋肉がどのくらい萎縮してどのくらい霜降りになるのかを定量す

ることを始めました。この方法論が十分に確立されていなかったため、何も無いところからのスタートとなりかなりの時間を費やしています。最近やっと少し予備的なデータを出せるまでになりました。あともう少しでOKが出そうなところまで来ました。

さて、今回サバティカルの制度を利用して、1年間の在外研究に来ているわけですが、この制度を使って感じたことを簡単に述べたいと思います。良い点としては、言うまでもなくある一定期間、大学の授業や雑務から解放され、研究に専念できる時間が費やせることです。今回においても様々な新しい情報を得ることができましたし、新しい体験をすることもできています。

一方、サバティカルをとるにあたり、注意しておかなければいけない点もあります。渡航前から渡航直後にはかなりの準備金が必要となります。今回の私の場合（家族4人）も渡航費、海外医療・傷害保険、車の購入および住環境の整備・充実等にこれまでに数百万円という資金を費やしています。予想以上でした。これは決して豪華な生活を送っているわけではなく、かなり切り詰めた生活をしていても利便性や安全を確保するためには、このくらいかかってしまいます。このサバティカルという制度は確かにいい制度ではありますが、このようにかなりの自己資金が必要になるということです。

名古屋大学やその他の日本の組織から給与以外のサポートがあるとは考えにくいので、自分で工面するしかありません。原稿料や外部講師などで得た資金を少しずつ貯めておきましたが、すでに渡航前に使い果たしてしまいました。あとは委任経理金などを導入するのも一つの手段かと思いません。もちろん、サバティカルを国内で過ごすというのも可能なわけですので、様々な事情で海外渡航が難しい方においては、それも選択肢の一つかもしれません。今回の私の場合は個人的な理由で自己資金にあまり余裕がなかったため、渡航前から渡航直後はかなり苦労をしました。今後この制度を使って海外に行かれる方々においても、ご自分の財産を削って行かなければならないかと思えます。かつての文部省在外研究員の時のような潤沢な資金のもとで渡航はできませんので、特に若手から中堅の方が行かれる場合はその覚悟が必要かと思えます。以上のような情報が今後海外に長期で行かれる方々の参考となれば幸いです。

最後になりましたが、私の1年間の不在に際して総合保健体育科学センターの皆様には大変ご迷惑をおかけしております。この場をお借りして御礼申し上げます。（体育科学部）